

## 「つなぐ」ということ

古川義郎

登壇を依頼されてから、何を話すべきか非常に悩んだ。ほとんどの人が、かつて中学・高校で教員と接した経験を持ち、「教職とは何か」という一般論を私が語ったとしても、特別な知見を提供することは難しい。ただ、この学び舎で過ごし、ここで学んだことが現在の教育実践とどのように結びついているのか、その個人的経験を語ることだけが、私にできる唯一のことだろうと考えた。

教員としての姿を最も端的に示すのは授業だろう。ここで、今年度、高等学校三年生で行った大学共通テスト現代文対策の初回授業を例に挙げたい。黒岩重吾『脳死の残影』の問題本文の冒頭である。

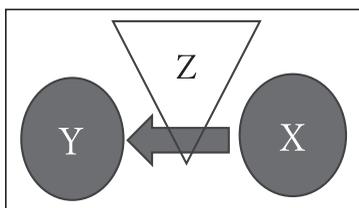
深夜、私は一人で母に会いに行った。

母は二年余り入院していたが、一番多く見舞ったのは大阪の弟である。私は仕事が忙しいという理由で、週に一度しか見舞っていない。自宅から病院まで車で二十分足らずである。もっと見舞っておけば良かった、という悔いの念が込み上げて来る。

この教行をどう読むか。

常に生徒に伝えるようにしていることがある。「読み」とは、自己とテキストとの交差点に生じるものである。テキストそれ自体は変わらないが、読者の側の変化によって「読み」は変質しうる。その変質を意識的に経験する営みこそが「学び」であり、そうした変質を積み重ねることが「成長」に他ならない。たとえば小説における「主人公」とは何か。それは「変質」あるいは「越境」する存在であるとと言える。主人公がX的な状態から、ある出来事Zを契機としてY的状态へと移行する——その変化こそが物語構造の要であり、出題者はしばしばこの変化に焦点を当てた面を取り上げる。

そして、主人公のXの特徴を浮かび上がらせるためには、比較対象としての「脇役」が必要となる。たとえば、『ドラえもん』の主



人公は、変質するという点において「のび太」だと言えよう。彼の欠損——たとえば腕力の不足や経済力の欠如、学力への劣等——を強調する存在としてジャイアン、スネ夫、出木杉の各キャラクターが配置されている。のび太はその欠損をドラえもんの道具によって一時的に補い変質するが、それはのび太自身の変質ではない。のび太はその道具を扱いきれなくなり、再び欠損する。彼が欠損し続けるがゆえにあの物語は続いていくのだが、この構造理解は文学作品を読む上で応用可能な枠組みとなる。

再び黒岩の冒頭を読むと、「大阪の弟」によって主人公「私」の特質が際立つ。自宅から二十分の距離にもかかわらず見舞いが少ないこと、対照的に弟が積極的に母のもとを訪れていることから、「私」の親不孝や母との乖離が強調される。物語は、その乖離がどのように変化していくか、おそらく近づいていくのではないかと、という推測とともに読み進めていくことができる。

私が小説読解にこのような構造的視点を持ち込むのは、山口大学在学中に平野芳信先生のもとで学んだ影響である。「読みは自己とテキストの交差点に生じる」「主人公は越境・変質する」——どちらも恩師の言葉である。平野先生をはじめ、私が学んだ先生方との出会いは、私にとってかけがえのないZ的存在であった。

先日、担任として初めて卒業させた学年の同窓会が開かれ、当時の生徒から「主人公は変質する、越境する、覚えています」と声をかけられた。私の中にある平野芳信が私の生徒の中にもいる。ささやかなことかもしれないが、「知」が次代へと伝わっていることを実感する瞬間であった。

かつて学生時代に親しんだ大学周辺の店の多くが、今は姿を消しており、残っているものはわずかである。残り続けることは容易ではない。文学や知というものも同様ではないか。それを「面白い」「尊い」と感じ、受け継ごうとする人がいて初めて存続する。人の手によってつなぐれ、淘汰を免れたものが「文化」となるのだろう。その意味で、教職とは「知」や「文化」を意識的に「つなぐ」営みに他ならない。人をつなぎ、知を次代へと橋渡しする、その過程が教職の根幹にある。

私の勤務する慶進中学校・高等学校は私立の中高一貫校である。私はこの学校の一貫教育一期生を中学三年生から高校三年生まで担任した。先述の同窓会の学年である。当時二十代半ばの若手教員であった私は、「中高一貫教育」とは何かをほとんど理解していなかった。

そんな折、東京の著名な中高一貫校の校長とお話しさせていただく機会を得、こう言葉をいただいた。

「古川さん、中高一貫教育の要は何かわかるかい？ 授業数が多い、授業進度が早くて大学受験に有利だ、そんなものは、おまけでしかない。

ルソーがこう言っているでしょ。

『人は二度生まれる。一度目は存在するために。二度目は生きるために』

中高一貫教育は、思春期という子どもが『二度目に生まれる』時期を、断絶なく見守ることにこそ意義がある。中学から

高校にかけての思春期は、まさにこの『第二の誕生』の時期である。子どもたちは、社会との関わり方、自身の立ち位置、他者との折り合いを模索し、混乱と苦悩の中で新たな自我を形成する。その大切な過程を途切れさせるのが高校受験である。

中高一貫教育の最大の意義は、学習カリキュラムの効率化などでは決していない。教員と家庭が協働して、思春期の子どもを連続的に支え、どう生きるかを見出す支えとなることにある。」

そう、教えられたことを今でも鮮明に思い出せる。己の、人間としての弱さと可能性に向け、何を志すかを内発的動機に求め、生徒の「生きるための誕生」を支える。この哲学こそが、慶進の一貫教育の基盤である。

思い返せば、生徒は常に私にとってZ的存在であった。彼らの成長に直面することで自身も変質せざるを得ず、彼らが教員としての私を育てた。

二十年を経て、自分たちの子どもを入学させたいと願う、そういう学校を皆で創ってきた。この地域に慶進が「残り続ける」ために、もう少しだけ役割を果たしたいと思っている。

現在、私自身が特に楽しんでいるのが、文系生徒対象の「文学国語」の授業である。週三コマを通して、生徒とともに作品の全体構造把握から助詞の機能に至るまで精読を重ねる。

この授業で大切にしていることが二つある。

一つは、「自分にはこう読める」という姿勢を示し、生徒に「君たちはどう思う?」と問いかけながら進めることである。教材とし

て扱った幸田文『藤』では、出題された設問に対して、複数の予備校の解答例や私の解答、そして生徒自身の解答を比較検討する。私自身が、私の読みと解答に説明責任を果たす。「確かにこういう解答例もある。だが、私は不十分だと思う。なぜなら――」

模範解答などは存在しない。解答例があるだけである。もちろんそれらは参考にはなるが、そこが最終的なゴールではない。むしろテキストに向き合い、自分の頭で考え、自らの責任で解を見出すことが本質であり、それが本来の学びであると考ええる。それは人生においても同様ではなからうか。モデルケースを見習うことは非常に大切な。ただ、最後に自分の人生における判断に責任を負うのは自分自身であり、自分の人生は自分だけのものである。

もう一つは、常に見えていないことがある、ということに気づかせることである。私たちは、読解でも人生でも、不明瞭なことは無視し、際立つところに意識を奪われがちだ。同じものを目にしているながら気づけなかったことを、級友との対話が一瞬にして諒解へといざなう経験。その時の快感と悔恨。

思えば、学生時代に学んだこと、あるいは常に突きつけられたことは、いかに自分が「見えていないか」「読めていないか」ということであった。認識できていないことがあることを自覚することは、見えないもの、見逃しているものを用意深く見ようとすることは、どのような仕事でもそうであろうが、教職には必要な姿勢のように思う。

教員、あるいは学校というものは、ひとつの側面としておそらくZ的存在であるはずだ。一人の教員がすべての生徒に対してそうあ

ろうとすることは傲慢の極みであろうが、誰かにとつてそうなる可能性がある、そのことに責任と幸福を感じることに、また、これまでつながつてきた「知」を次代へつないでいくことに喜びを見出すこと、人と過ごす時間を楽しいと感じること、これに尽きるように思う。

もちろん、まだ見えていないことは多いのだろうけれど。

(ふるかわ・よしろう)